



小宮山博史 講演会 誰が明朝体を作ったのか ～その誕生と歴史～

3月16日(土) 午後2時30分～午後4時30分(開場：午後2時)

講師：小宮山博史 (こみやま・ひろし)

(書体デザイナー、活字書体史研究家佐藤タイポグラフィ研究所代表)

演題：「だれが明朝体を作ったのか～その誕生と歴史」

会場：3階 多目的ホール 入場無料

主催：北島町立図書館・創世ホール(☎088-698-1100)

特別協賛：阿佐ヶ谷美術専門学校、印刷史研究会、佐藤タイポグラフィ研究所、
(有)字游工房、誠文堂新光社、日本タイポグラフィ協会、
ヒラギノフォント((株)SCREENグラフィックソリューションズ)、
ビーグラフィックス

■漫画・ロック・特撮・SF・幻想文学…現代に至るまでのサブカルチャーについて、
当館は過去に様々なテーマで講演会を開催してきた。今年は活字書体研究の第一人者
であり、書体デザイナーでもある小宮山博史氏をお招きし、書物に欠かせない活字書
体についてご講演いただく。(書影は氏の著作『日本語活字ものがたり』誠文堂新光



社刊) 印刷物でお馴染みの明朝体、そのデザイン様式は、字
面のとおり宋～明代の中国において木版書体として開発され
たが、今日の印刷・表示用の代表書体に定着したのはなぜか、
また、それは一体誰の手によるものなのか。日本の近代化を
支えた立役者でありながら、活字史の中でほとんど語られる
ことのなかった近代明朝体の来歴について、多数の図版を用
いてわかりやすく解説する。多数、ご参集ください。



講師近影 (撮影・提供＝鳥海修)

笑福亭たま & 旭堂南湖 二人会 ⑫

3月31日(日)

午後2時30分～午後4時30分(開場：午後2時)

会場：2階 ハイビジョンシアター

入場料：大学生・一般 前売1,500円/当日2,000円

小中高校生 前売1,000円/当日1,500円

電話予約は創世ホール(088-698-1100)まで

出演：笑福亭たま(しょうふくてい・たま/上方落語家)

旭堂南湖(きょくどう・なんこ/上方講談師)

演目：たま・落語「小言幸兵衛」ほか1席、

南湖・講談「赤穂義士銘々伝・赤垣源蔵」ほか1席

主催：たま・南湖二人会実行委員会



徳島クリエイターズマーケット ⑳

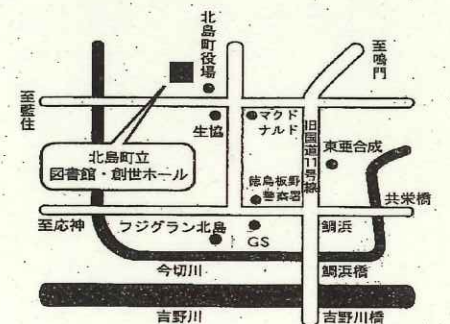
4月13日(土)・14日(日)

午前10時～午後5時(最終日は午後4時)

会場：2階 ギャラリースペース 入場無料

主催：徳島クリエイターズマーケット事務局(川久保☎080-3162-2234)

全国からモノづくり人が集う県内最大級のハンドメイドマーケット、今年も
北島町で開催決定！



文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

小宮山博史さん講演会にご期待下さい

演題★だれが明朝体を作ったのか～その誕生と歴史

北島町立図書館協議会委員長、創世ホール・サポーター★小西昌幸

■3月16日(土)に北島町立図書館・創世ホールは、小宮山博史先生講演会「だれが明朝体を作ったのか～その誕生と歴史」を開催します(14時30分開演、3階多目的ホール、入場無料、事前申し込み不要)。

■書体設計士で活字書体史研究家の小宮山博史さんとは1995年秋から書簡による交流が始まり、直接お会いしたのは翌96年のことでした。今から20年以上も前のことです。出会ったいきさつなどについては、以前『自治労通信』の書評欄に小宮山さんの単独著作『日本語活字ものがたり』(誠文堂新光社)の紹介を書いた文章で触れているので下記に転載しておきます。

『自治労通信』書評原稿

小宮山博史「日本語活字ものがたり 草創期の人と書体」(誠文堂新光社) 書物の根幹を成す活字、その歴史と書体の偉大な研究

小西昌幸(自治労文芸幹事・四国地連)

小宮山博史さんは、1943年東京生まれ。現在は横浜市に住み、佐藤タイポグラフィ研究所を主宰する書体デザイナーだ。多くのパソコンに標準装備されている「平成明朝体」は小宮山さんがデザインしたものである。氏は印刷史研究会代表で、わが国における活字書体史研究の第一人者でもある。

書評子(小西)は、元『音楽全書』『同時代音楽』編集長・府川充男という人と70年代から懇意にいただいているのだが、この5歳年長の知人が、本の装丁や文字組版の実践を通じて、活字書体史の研究にのめりこみ、その方面で第一人者になってしまった(府川さんは日本で5本の指に入る研究者になり、小宮山さんや日下潤一さんと印刷史研究会を結成)。その関係で、私は世間一般人よりは、少々印刷史研究の世界に関心がある。

小宮山さんとは府川さんの紹介で1996年に知己を得て、以後可愛がっていただいている。たまに電話をかけると「どうだい小西君、妻子と沢田研二コレクションを捨てて、印刷史の研究をやらないか。楽しいぞ」などと小宮山さんから恐ろしい勧誘を受けることがあり、そのたび私は冷や汗をかきながら、謹んで辞退している(そもそも小宮山さんにはちゃんと妻子がおられる)。

本書は、その小宮山さんの待ちに待った単独の著作である。中身はとても濃い。日本の活字の源流をたどるとき、長崎の本木昌造という人に行き着くのだが、そこからさらに調査を深めると、中国大陸で西洋人がキリスト教布教のために漢字を徹底的に調べ上げ、印刷所を作り、何千字もの活字を彫ったことなどが浮上する。ドイツのグーテンベルクが最初に印刷したのが聖書だったことと同様に、東洋での近代活字印刷の源流にも宗教活動が深く関わっているのである。

また、フランスの王立印刷所の活字見本帳には、一つの書体見本の横にそれを作ったデザイナーの氏名が記載されているのに、日本では全くないのである。結局この国の、近代文化の基礎に関わった活字職人さんたちは全て無名の下積みの人として扱われてきたのだ。小宮山さんは本書でそのことを嘆いておられる。

書物の根幹の一つ、活字。それらは無名の職人達が実践の中で磨き上げ、1字1字彫って行ったのだということが本書によって力強く提示されている。

■先の書評原稿は2009年の刊行時に書いたものですが、「創世ホール通信/文化ジャーナル」11号(1995年12月1日発行)には小宮山さんからの書簡を掲載させていただいています。これは、「創世ホール通信/文化ジャーナル」10号で小宮山さんたちの『印刷史研究』を紹介したことへのお礼のメッセージでした。その中に、今回の講演会のテーマに直結する内容が含まれており、示唆に富んでおりますので全文再掲載します。

【小宮山博史さんから小西昌幸宛の書簡】

「創世ホール通信」拝受いたしました。ありがとうございました。また『印刷史研究』をとりあげいただき感謝いたしております。小さな無名に近い同人が作っておりますので、どこまで浸透するかわかりませんが、できるだけことはやってゆきたいと考えております。今後とも、なにとぞご批評をたまわりたくお願い申し上げます。

日本の近代印刷史、特に書体史はまだ調べる余地のある分野です。印刷用の書体によって、わたしたちは技術・思想そして精神を過去から受けつぎ、そして次世代へ伝えていることを忘れていたのではないかと考えています。読めればいい、分かればいいというのは誠に不遜な言い方だと思うのですが、そういう認識でしか書体を見ていない人も多いようです。そして、それらの書体には、ヨーロッパ・アメリカの技術技術が不可欠であったわけで、書体史を考える上で「世界の中での日本」という視点を、残念ながら先人研究者は落していたように思います。そのため誠に不可思議な説が定説として流通していること、その罪は大きいと思っています。書体は人のためにあります。より良い書体を提供するように、書体を扱うわたしたちは発言すべきだろうと思います。

徳島県鳴門市のドイツ館に大量の印刷物があることを、貴通信で知りました。機会があれば訪ねたく存じます。

四国の宇和町(愛媛県ですが)に保存されている昭和及び大正建築の小学校の教室に、毎日新聞社の活版機械が保存展示されています。正確には展示準備中ですが、毎日新聞社が活字を使って新聞を組んでいたそれらの機会は、1989年12月に役目を終えましたが、その一部が日本タイポグラフィ協会を通して、宇和町に寄贈されたのが今年(1995年)6月です。宇和町や宇和島市のある愛媛県南予地方は、ご存じのとおり、井関盛長(いせき・もりとめ)、末広鉄腸(すえひろ・てっちょう)をはじめとして多くの新聞人・ジャーナリスト・文人を出していますので、それらとの関係で展示できたらいいなと思っております。

長くなりました。今後とも「印刷史研究会」へご支援をいただきたく、お願い申し上げます。

1995年11月9日 印刷史研究会・小宮山博史

■そして1996年3月5日に小宮山さんに直接お会いし「文字作りの現場から」というインタビューを新宿の朗文堂で収録させていただきました(朗文堂代表・片塩二朗氏参加)。その記事は「創世ホール通信/文化ジャーナル」に掲載し(96年5月号-7月号、9月号-11月号)、のち私のミニコミ『ハードスタッフ』12号に収録し、幅広く流通させることができました。「文化ジャーナル」では、その後も府川充男さんや日下潤一さんのインタビューを掲載していますが、小宮山さんはその都度参加してくださって(無理やり参加をお願いし)、貴重な発言を記録することができています。

■余談ですが、ある時(たぶん2000年代初めごろ?)、全く名も知らぬデザイナーの方から図書館事務室の小西宛にお電話があって、「文化ジャーナル」での一連の文字やデザインや装釘や組版などに関する記事をまとめて

送って欲しい旨のご要望を受け、驚いたことがあります。なんでも、デザイン関連の「文化ジャーナル」記事が何度もコピーを重ねた状態で若手デザイナー間で出回っており、それらが不鮮明になっているので、きれいなものを読みたいとのことで、とても光栄に思ったことでした。

■小宮山さんとは2000年前後には上京時にひんぱんに新宿で府川さんと共に会っていただいていたことあります。『芸術新潮』主任編集員(当時)三好雅司さんにご一緒していただいたこともあります。首都圏以外では、1996年6月29日の愛媛県宇和町(現西予市)米博物館活版資料室オープン記念行事や、神戸の博物館で本木昌造の父親についての講演があったときにも、お誘いを受け、お目にかかっています。府川さんや日下潤一さんや前田成明さんも一緒でした。どれも懐かしく楽しい思い出です。宇和町での記事は「文化ジャーナル」19号(1996年8月1日)に詳細レポートを載せています。

■小宮山さんは、日下潤一さんが長期にわたりアート・ディレクションを務めた『芸術新潮』(1994年~2014年4月号)のタイトル文字のレタリングをご担当されておりました。だからその時期の『芸術新潮』目次頁の片隅のクレジットを注視すると小宮山博史という名前が刻まれています。同誌旧号を見かけることがあれば、ぜひチェックしてみてください。

■昨年4月27日から7月16日まで横浜開港資料館で、小宮山さんの50年以上にわたる活字文化の膨大な収集資料を展示した企画展「金属活字と明治の横浜~小宮山博史コレクションを中心に~」が開かれました。6月23日には小宮山さんが講演されるということで、私は徳島からはせ参じました。満席で熱気あふれる客席には療養中の府川充男さんの姿もありました。

■創世ホールの講演会シリーズは、書物文化を様々な角度から照射するものでもあります。第1回は辞典づくりにかけた人たち、それから編集、異端文学(流澤龍彦と土方巽)、ミステリー、SF、トキワ荘マンガ家、ブック・デザイン、特撮資料などについて第一線の方に語っていただきました。近年は映像や大衆音楽の分野にも裾野を広げていますが、いよいよ原点に立ち返り、書物の重要な根幹的構成要素の一つである活字書体~印刷史の分野に足を踏み入れます。いうまでもなく、人口2万3千人の四国の田舎町の催しとしては大冒険企画であります。困難は覚悟の上で企画立案しました。ですから広報宣伝には、命を削る決意で取り組んでいます。

■実は、今回の講演会企画で最初に小宮山さんに講演依頼を打診した時、遠くに行くのは面倒くさいから嫌なんだ、と言われました。必死で口説き、手紙をお送りしご納得いただきました。2月7日、横浜の佐藤タイポグラフィ研究所にお邪魔して打ち合わせした時、小宮山さんは「多分単独の講演は小西君のところまで最後になると思うんだ」とおっしゃいました。そんなこと言わずに、もっともっとご活躍いただきたいと思っています。

■3月から図書館カウンター前では、小宮山さんからお預かりした貴重な復元活字の原字や書籍資料を展示します。原字は方眼紙にスミ一色で書かれた美しいものです。貴重な現物なのでガラス・ケースにおさめます。ぜひ、ご覧になって下さい。そして3月16日の講演会にはぜひご近所・ご友人お誘いあわせの上、多数ご来場ください。(20190301脱稿 文責=小西昌幸)